

月報

7号

発行
行
所

青丘文庫

発行★韓 哲 曜 編集★金 慶 浩
〒654 神戸市須磨区千歳町4丁目1-3
エバーグリーンビル5F
TEL (078) 734-5989

韓国知日派の『日本論』

梁 永 厚

韓・日問題や両国の比較文化論の本が書店でよく目につくようになった。大手の書店の韓国・朝鮮コーナーに横並びもされるようになり、文化交流、相互理解を深めていくうえで喜ばしいことである。

こうした書物を通して、新しい知識を吸収したり、新しい発見をしたりするのであるが、ときに、気懸りな論調が目にとまる。韓国知日派の論調の中より、気懸りになる点をあげておきたい。

一つに、『韓国人と日本人』（サイマル出版）他を出しておられる漢陽大校の金容雲教授の論調が目につく。

『韓国人と日本人』のなかで、日本の俳人松尾芭蕉の句、「猿の聴く人 捨子に秋の風いかにし」を引き、「天のさだめしとこ

ろと、みてみぬふりをするのか 日本民族が生きているための知恵であったのかもれない」と書いておられる。同じ句について、韓国の月刊誌『韓国人』の一九八三年四月号、「特集、日本・日本人その七つの顔」に、「便宜主義的であり、現実的な意識構造」というレポートもされたなかで、「彼（芭蕉）はありゆる人間事は定められた運命に従うのみであると断定し社会の現実に対して一切の批判をせず、哀れな者、圧迫されている者、弱者に対しては関心さえもなかった。」と評されて、「社会が病むとき最初に苦痛の声をあげるのが詩人であるのに、弱者に強い。」と論じておられる。

芭蕉をトータルにどれ程理解されて書いておられるのか疑念が湧いた。芭蕉は弟子の其角が「赤とんぼ 羽根をとったら唐辛子」と詠んだのにたいして「唐辛子 羽根をつけたら赤とんぼ」と返している程に 人をいさものと自然さ、こゝろよく愛した人だとされている。

金容雲教授の論調で、日本独特な芸術様式である俳句の代表的人物である芭蕉を 韓国の人たちに紹介をすれば、どのようは日本認識が形成されていくのだろう。気懸りで足りない。

もう一つあげるならば、『縮み志向の日本人』(学生社)を著かれた梨花女子大学の李御寧教授の論調である。

今年の『韓国日報』の新年特集として、七回に亘って「解放四〇年・国交正常化二〇年、両国頂上評論家対談」「韓・日第三の二〇年」と銘打った、日本の評論家山本七平氏との対談における李御寧教授の発言である。

「昨年九月、全斗煥大統領が韓国の国家元首として、はじめて日本を公式訪問され、天皇の謝罪(謝過)をうけました。これと関連した話ですが、在日韓国人である友人の一人娘が、日本人の男性と結婚しました。はじめ結婚話が持ちあがったとき、男性の家が反対をしました。ところが、日本の昔の文化は韓国から来た人が持ってきたもの」と天皇の謝罪のことは聞いて、『天皇が嘘をいわれる筈がない。今年前に来た人も、五〇年前に来た人も同じではないか』といい結婚を許したという。

この発言は、内容が事実であったとしても、韓・日両国において、お互いの正体を引きだすための文化交流を説くための話としては、不適当でないかと思う。天皇をもち出すこと

によって、韓・日両民族間のしからずが解決されるかのごとく発言は、あまりにも迎合的にすぎる。このような発言をしている韓国知日派の彼に、やはり懸念を抱かざるを得ない。韓国の知日派のなかには、植民地期を生きたことで、日本に通じていると自認している向きがあるようである。近代の両国間関係の正しい認識に立って、今後の友好、善隣関係を構築するものにしていくためには、表層的、実利的な研究や論調をあらため、日本の政治、経済、文化の本質に迫る研究の上での「日本論」の展開を望みたいものである。

★ 研究報告

朝鮮民族運動史研究会

第四大回

「報告者 鹿嶋節子氏 (一九八五・五・一八)

「朝鮮義勇隊について」

朝鮮義勇隊は一九三八年十月〇日・中国・漢口で金元鳳を中心とする、いわゆる民族主義左派によって結成された。

金元鳳については義烈団を結成しての爆弾テロ闘争の片ならず、その後の長年に亘る中国での朝鮮解放への闘いについ

ても決心を持ってきたが、日中戦争の全面化、日本の敗戦、朝鮮の解放へとつながるこの時期は金元鳳とその同志たちにとっても前回の論議算ともいえる時期である。

一九三七年の盧溝橋事件による日中全面戦争直後から、金元鳳らは「中国の解放は朝鮮の解放につながる」という確信のもとに中国軍とより緊密なつながりをもつて共に闘つことを表明し、大同団結へむけての動きを多角化させた。

朝鮮義勇隊の人員は五四〇年二月現在で三二四名という数字があり、大部分は朝鮮人で、何人かの日本人、中国人も混じっていた。彼らは四正隊に分かれて、それぞれ中国軍の各戦区へ派遣された。抗日戦における彼らの任務は、情報蒐集、宣伝工作、日本人捕虜の取調や慰問工作が、その主たるものであった。幹部は金元鳳、申岳、金堂武、石正らである。

朝鮮義勇隊員の中には一九四〇年頃から華北へ向う者があり、それらの人々はおちに延安で、朝鮮独立同盟を結成していくことになる。朝鮮義勇隊がこのように華北へ行く者と留まって国民党軍と共に闘い、また、従来対立関係にさへあった臨政へ参加していく者などにわかれていくについては、何らかは自意見の相異があったのか、また、義烈団時代

からの古い同志が何人か延安へ行ったにもかかわり金元鳳や留まった理由といったことも明らかにしたい筈だが、また、それにいつたっていない。この頃の事情について書かれたものは少なく、また、あったとしても「回顧録」のようなものでも客観性に乏しい。

今までに入手したものを少し紹介し、それによっていくらかでも客観化出来たのかと考えたが難しい。金九りとの合作と臨政への参加、大韓光復軍と朝鮮義勇隊の合併という事柄については今回の報告では、ほとんどふれ得なかった。

兎に角、朝鮮義勇隊について調べる場合は中国側の文献による必要があるもので、中文の資料にたんねんにあたること、出来れば、現在、台湾にしか残っていない資料にも目を通すように努力すること、これらが今後の最大の課題である。



★ 次回案内

※ 報告者の都合により

① 在日朝鮮人運動史研究関西部会例会 (第七二回)

報告者

仁木愛子氏 (一九八五・七・二四(日) 三時半)

テーマ

泉州地方の在日朝鮮人史

『月報』八月は休会です

② 朝鮮民族運動史研究例会 (第四回)

報告者 原田環氏 (一九八五・七・三一(土)三時)

テーマ 申升浩の歴史思想について

③ 研究報告予定者は次の通りです

▲ 民族運動史研究 (八月はお休み)

九月二日 金森素作氏、一〇月四日 堀内純氏、一二月二日

姜在彦氏、▲ 在日朝鮮人運動史研究 九月八日 金

森素作氏、▲ コメント(月報一面) 八号 堀内雄

一氏、九号 谷合佳代子氏、一〇号 堀内純氏、一二号

山中速人氏、一三号 伊藤悦子氏、※ 原稿は二〇日

迄に送くようお願いします。

新着図書案内

▲ 日本帝國主義下の朝鮮伝道 飯沼二郎・韓哲暉著

東京 日本キリスト教団出版局 85.6. A5

▲ 牢獄の政世主 那須聖著 東京 蒼生社 85.2. A5

▲ 朝鮮總督府官報 11520巻 (一九一三〜一九一五)

臣細臣文化社編 11号 同社 85.5. A4

▲ 海外外誌 113, 114号, 現行刊行中 昭陽 外語出版

外語出版 85.1.2. B5

▲ 海外外誌 140, 141号 現行刊行中 昭陽 外語出版

海外外誌 85.1.4. B5

▲ 韓国文化 (5) 韓国文化研究所編 11号 서울大校

出版部 84.12.一七三P. B5

▲ 朝鮮史研究論文集 2, 朝鮮史研究会編 東京 同会

85.3.二四〇P. A5

▲ 東方學志 35, 36, 37, 41, 42号 韓國研究院編 11号

延世大校出版部 B5 一〇冊まで揃いました。

▲ 韓國史論 12, 13, 14号 國史編纂委員會編 11号

同会 A5

▲ 韓國史研究彙報 47, 48号 國史編纂委員會編 11号

同会 85. B5

▲ 韓國學報 38号 金聖武編 11号 一志社 85.3. A5

▲ 朝鮮關係文獻・資料繪目録 財友邦協会編 東京

友邦協会・中央日報協会 80.3.301+123P. B5

★ おしらせ

朝鮮民族運動史研究 2号が出版されました。

(姜侯相・宋淳王・堀内純氏の日記文他)